

『奥の細道』と白居易の「三月尽」

新 間 一 美

【要旨】

松尾芭蕉の『奥の細道』は、「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」で始まっており、李白の「春夜宴桃李園序」（古文真宝後集）の冒頭部「光陰者、百代過客」を踏まえたものとされる。その後、「弥生も末の七日」（元禄二年（一六八九）三月二十七日）に深川の芭蕉庵を出発する。門人に見送られ、彼等と千住で別れる時に「行く春や鳥啼き魚の目は泪」を詠み、それを「矢立てのはじめ」として、そこから旅が始まる。春から夏へと季節が移り、平泉で杜甫の「春望」詩の「城春にして草木深し」を踏まえた「夏草やつはものどもが夢の跡」の句を詠む。ほぼ半年の旅が続いて、九月六日に岐阜の大垣で「蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」の句が詠まれて、作品が終わる。

この「行く春」と「行く秋」は首尾呼応しており、冒頭の「百代の過客」も加えて、作品全体の主題を示しているとも考えられている。

「行く春」は「三月尽」の、「行く秋」は「九月尽」の文学的主題を詠んだものであり、ともに和漢朗詠集中に部立が見られる。「三月尽」は白居易が好んだ主題でその影響がわが国に及んだもの、「九月尽」は「三月尽」を受けてわが国で発達した主題である。この二つの主題に基づく表現については中唐詩の影響と言つてよい。

近世では、李白や杜甫などの盛唐詩が重視されたことは周知であるが、その反面、白居易を代表とする中唐詩については、相対的に軽視されてきたとされる。『奥の細道』の場合も李白や杜甫作品の影響ばかりに目が行きやすいが、右の首尾呼応は、盛唐詩から発展した中唐詩の発想を受けたものであることに目を向けるべきであると考ええる。

一 李白の「春夜宴桃李園序」と芭蕉の旅への思い

芭蕉が『奥の細道』を「月日は百代の過客」と筆を起したのは、李白の「春夜宴桃李園序」（以下「李白の序」）に拠る。この李白の序は、『古文真宝後集』に見える。

夫天地者、万物之逆旅。光陰者、百代之過客。而浮生若夢、為歡幾何。古人秉燭夜遊、良有以也。

況陽春召我以煙景、大塊假我以文章。會桃李之芳園、序天倫之樂事。群季俊秀、皆為惠連。吾人詠歌、獨慚康樂。幽賞未已、高談輒清。開瓊筵以坐華、飛羽觴而醉月。不有佳作、何伸雅懷。如詩不成、罰依金谷酒數。

「浮生」の夢の如きはかなさを述べて、楽しむべき時の短さを指摘し、その故に「桃李」の美しい夜に灯火を取って夜遊し、月のもとでの宴で詩を作るという内容である

この李白の序を踏まえて『奥の細道』は始まる。(第一段・引用は新潮日本古典集成『芭蕉文集』)

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮べ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を住みかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず。海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を払ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて取もの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒つけかへて、三里に灸するより、松島の月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替る代ぞ雛の家

表八句を庵の柱に掛けおく。

太陽や月は永遠の「旅人(過客)」であり、「年」もまた「旅人」である。(人間も万物の一つとして「旅人」であるが、特に典型的な者として)舟の上で一生を送る者や馬を引く馬子が、旅に生き、旅に老いて死ぬ者であり、(天地が万物を泊める旅館であるように)旅というものが彼らの「すみか」なのである。(彼らと同様に人間の一人である私も旅人であることがその本質である。風雅の先輩である李杜・西行・宗祇のような)古人も旅でその生涯を終えた。自分もいつ頃からか、旅に生きることになり、『更科紀行』の旅を終え、去年の秋に江上の破屋(江戸、隅田川沿いの芭蕉庵)にもどったものの、春になって霞が立つと白河の関を越え、松島の月を見る(陸奥への)旅に出る気持ちになった、という内容である。

李白の序は、「天地」と「万物」「日月」との関わりを「逆旅（旅館）」と「過客（旅人）」との関わりに喩えているが、芭蕉は、月や太陽に加えて、「年」もまた旅人であると言う。「天地」が万物の旅館であると言う代わりに、「旅」が（人間の）「住みか」であると言いつた変えている。即ち、「天地」が万物の入れ物であるように、「旅」に生死することが人間の本質であるとする。

「旅」という本質的な「住みか」に対し、日常的な実際の「住みか」である芭蕉庵の方は仮の宿りに過ぎず、ここでは「破屋」「草の戸」と記されている。その住みかが仮の宿りであることを示すために、「住み替る」と言っている。このあたりは、人と住居との無常のさまを描いた『方丈記』の思想を取り入れていると思う。

芭蕉は、李白の序の主題を変えて、人生の本質は旅であることを述べ、自らも旅に老死すべく、陸奥への旅に出発することを述べているのである。なお、後掲の第二段を加えて両者を比較するならば、暮春の花の時節を背景とすること、目的が仲間うちで「文章」を作ること、世の中を夢まぼろしのようにだとすること、煙景の中の月のものであることなどが共通すると言えよう。

二 杜甫の「春望」詩とみちのくへの旅立ち

『奥の細道』の冒頭第二段は、暮春の曙の風景から始まる。

弥生も末の七日、あけぼのの空朧々として、月は有明にて、光をさまれるものから、富士の峰かすかに見えて、上野・谷中の花のこずゑ、またいつかはと心ぼそし。むつまじきかぎりは宵よりつどひて、舟に乗りて送る。千住といふところにて舟をあがれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそそぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は泪

これを矢立のはじめとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ちならびて、うしろかげの見ゆるまではと見送るなるべし。

旧暦三月二十七日の夜から明け方に懸けて、有明の月とともに、江戸の桜の花と富士山に別れを告げ、千住まで舟で行き、そこで涙を流して門人たちと別れを告げる。そこで詠んだ「矢立のはじめ」の句が、「行く春や鳥啼き魚の目は泪」の句である。

この句と『奥の細道』の末尾、秋九月に大垣から伊勢に向かう途次に詠まれた最後の句、「蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」が相呼応するとされる。尾形仿氏は、次のように言われる。

「行く春」は刻々と移り過ぎてとどめることのできない春。空に囀る鳥、水に遊ぶ魚は、直接には千住で目にした囀目の風景に発想し、また、「別レヲ恨ミテハ鳥ニモ心ヲ驚カス」（杜甫「春望」）といった漢詩に詠まれている鳥や魚に発想したものかも知れませんが、同時に、この天地間に芭蕉と漂泊の悲しみを分かち合うものとして取り上げられたものでしょう。

一句は、行く春の名残を惜しんで、空の鳥、水の魚も嘆き悲しんでいる、と言って、春を惜しむ気持ちに、別れを惜しむ悲しみの気持ちを託したのです。

『おくのほそ道』という作品は、この「行く春」「行く秋」の照応を通して、人生は永遠に続く旅なのだ、というテーマを大きく語りかけているといえます。

『おくのほそ道』を語る』角川選書・平九（一九九七）

尾形氏は、「行く春や」の句について、杜甫の「春望」を取り上げているが、この点について黒川洋一氏は別な考察をされている（『杜詩とともに』創文社・昭五七（一九七九））。

春望

国破山河在、城春草木深
国破れて山河在り、城春にして草木深し

感時花濺淚、恨別鳥驚心
……

烽火連三月、家書抵萬金
烽火三月に連なり、家書萬金に抵る

白頭搔更短、渾欲不勝簪
白頭搔けば更に短く、渾て簪に勝へざらんと欲す

領聯は、一般的には「時に感じては花にも涙を濺ぎ、別れを恨んでは鳥にも心を驚かす」と訓むが、黒川説では、花や鳥を「そぞぐ」「驚かす」の主語として、「時に感じては花も涙を濺ぎ、別れを恨んでは鳥も心を驚かす」と訓む。この訓を強く主張したのは吉川幸次郎氏であり、黒川氏はそれを踏襲して、『奥の細道』と結びつけている。

芭蕉がその訓を用いた根拠として、黒川氏は、二つの根拠を挙げる。謡曲「俊寛」の中に、「時を感じては花も涙を濺ぎ、別れを恨みては鳥も心を驚かせり」とあること、元禄五年の「水鳥歌仙」での連句に、

水鳥よ汝は誰を恐るるぞ

兀峰

『奥の細道』と白居易の「三月尽」

白頭更に芦静也

芭蕉

とあることである。芭蕉の「白頭」の句は、兀峰の水鳥が誰かを恐れたという句から「春望」詩の「鳥も心を驚かす」を連想し、同詩第七句の「白頭搔けば更に短く」に基づいて詠んだとする。鳥が驚いたとする解釈に拠っていたから連句が成立しているのであると考察する。鳥が啼き、魚が涙するのは、「花も涙をそそぎ」「鳥も心を驚かす」に拠るという説である。

この黒川説を認めると平泉における、

さても、義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の草むらとなる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠うち敷きて、時のうつるまで涙を落しはべりぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白髪かな

曾良

という「春望」詩の引用に先立つものとなる。ただし、この両場面とも芭蕉は涙を流しており、特に「離別の泪をそそぐ」とあるところは、「春望」の「涙をそそぐ」に一致する。杜甫の詩の花鳥を擬人的に読む説に従ったとしても作者の感情を花や鳥に託しているのだから、離別に際して鳥が啼くように自分も門人との別れを悲しんで泣く、ということであろう。前書きに当たる部分では直接涙を流すと言い、句では、その心を鳥や魚に託したと考えることができる。その場合、次の第三段に「白髪」を持ち出して自身の老死について言及するのは、「春望」の尾聯「白頭搔け

ば更に短く、渾て簪に勝へざらんと欲す」に基づくのではないかと思われる。

今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚ただかりそめに思ひたちて、呉天に白髪の恨みを重ぬといへども、耳にふれていまだ目に見ぬさかひ、もし生きて歸らばと定めなき頼みの末をかけ、その日やうやう草加といふ宿にたどり着けり。

三、「行く春」と白居易の「三月尽」

冒頭部では、李白の序の引用に続いて杜詩も使われたことになり、盛唐の李杜の影響は大きい、中唐の白居易的発想も実は見られる。第一段から第二段を連続して見ると、旅をするのが「月」「日」「(行きかふ)年」から「(行く)春」になっている。発句主体で見ると、^③「行く春」という語を導き出すために李白の序を用いたとも言える。「春」こそが「百代の過客」なのであり、芭蕉とともに旅をする旅人なのである。それが、作品末尾の「行く秋」と呼応して、全編の枠組みを作っている。春や秋のような季節とともに旅をする自分を芭蕉は描こうとしている。

この「行く春」と「行く秋」は、もとは白居易の文学的主題の「三月尽」に基づくものである。平岡武夫氏は、白居易が春の終り行くのを愛惜する「三月尽」の主題の詩を多く作ったことを指摘された。氏は、「李白・杜甫・韓愈らの作品には、三月尽の言葉はついに用いられていない。もとより『文選』の言葉ではない」と言われ、その独自性を強調されている。以後研究が進んで来ているが、ここでは『奥の細道』との関わりについて考察したい。

白居易は季節の推移に敏感な詩人であった。例えば、次の詩が端的にそれを表わす。^④

新秋喜涼〔三一八六〕

過得炎蒸月、尤宜老病身
炎蒸の月を過し得て、尤も老病の身に宜し
衣裳朝不潤、枕簟夜相親
衣裳朝に潤はず、枕簟夜に相親しむ
樓月纖纖早、波風嫋嫋新
樓月纖纖として早く、波風嫋嫋として新たなり
光陰与时節、先感是詩人
光陰と時節と、先づ感ずるは是れ詩人

このように季節の推移に敏感な詩人としての本領を発揮したのが、春の終りを惜しむ「三月尽」の主題である。代表的な作品を次に並べる。

永貞元年（八〇五）三十四歳の時に長安の慈恩寺で詠んだ作がある。

* 千は『千載佳句』、和は『和漢朗詠集』所収

三月三十日、題慈恩寺〔〇六三一〕

慈恩春色今朝尽、尽日徘徊倚寺門
慈恩の春色今朝尽く、尽日徘徊して寺門に倚る
惆悵春帰留不得、紫藤花下漸黄昏
惆悵す春帰りに留むること得ざること、紫藤の花の下漸く黄昏たり

千〔送春〕・和〔送春〕

元和十年（八一五）三月三十日、四十四歳。三月尽と老の感慨が同時に詠まれている。

送春（〇四八七）

三月三十日、春帰日復暮

惆悵問春風、明朝応不住

送春曲江上、眷眷東西顧

但見撲水花、紛紛不知数

人生似行客、両足無停歩

日日進前程、前程幾多路

兵刃与水火、尽可違之去

唯有老到来、人間無避処

感時良為已、独倚池南樹

今日送春心、心如別親故

三月三十日、春歸りて日復た暮る

惆悵して春風に問ふ、明朝応に住まらざるべし

春を送る曲江の上り、眷眷として東西を顧りみる

但水を撲つ花を見る、紛紛として数を知らず

人生は行客に似たり、両足歩を停むること無し

日日前程を進む、前程幾多の路ぞ

兵刃と水火と、尽く之れを違けて去るべし

唯だ老の到来する有り、人間避くる処無し

時に感じて良に已めりと為し、独り池南の樹に倚る

今日春を送る心、心は親故に別るるが如し

この詩を詠んだ秋八月に江州司馬に左遷され、揚子江中流域南岸の任地に赴いた。翌元和十一年（八一六）に四十五歳になり、三月尽を迎えた。次の詩では前年の曲江での送春を思い出し、現在左遷されている江州との違いを対比的に表現している。（左遷二年目）

送春帰。元和十一年三月三十日作（〇五九二）

送春帰
春の帰るを送る

三月尽日日暮時

三月尽日日暮るる時

去年杏園花飛御溝綠

去年杏園花飛びて御溝綠なり

何処送春曲江曲

何れの処か春を送る曲江の曲

今年杜鵑花落子規啼

今年杜鵑花落ちて子規啼く

送春何処西江西

春を送る何れの処か西江の西

帝城送春猶快快

帝城春を送るも猶快快たり

天涯送春能不加惆悵

天涯春を送るに能く惆悵を加へざらむや

莫惆悵送春人

惆悵すること莫れ春を送る人

冗員無替五年罷

冗員五年罷むまで替ること無し

応須準擬再送潯陽春

応に須らく再び潯陽の春を送らんとすべし

五年炎涼凡十變

五年の炎涼凡て十變

安知此身健不健

安んぞ知らむ此の身の健と健ならざると

好去今年江上春

好し去れ今年江上の春

明年未死還相見

明年未だ死せずんば還た相見む

ここでは、都での送春と江州での送春を比較して、より悲しいと言っている。旅人となった白居易が、より辛い気持で春を見送る心境となっていることを言う。

翌元和十二年の春には、春が生じてから去るまでの三首連作を詠じている。三首目が三月尽の詩であり、二度目の

送春を明確に表現している。老の感慨も詠み込む。（左遷三年目）

春去（一〇二二）

一從沢畔為遷客、兩度江頭送暮春

一たび沢畔に遷客為りしより、兩度江頭に暮春を送る

白髮更添今日鬢、青衫不改去年身

白髮更に添ふ今日の鬢、青衫改めず去年の身

百川未有迴流水、一老終無却少人

百川未だ迴流の水有らず、一老終ひに却少の人無し 千〔老〕

四十六時三月尽、送春争得不殷勤

四十六の時三月尽、春を送りて争か殷勤ならざるを得む 千〔送春〕

この年の春、友人の「元八員外（元宗簡）」は江州の白居易に三月三十日に詠んだ慈恩寺の詩を送って来た。その詩に対し、白居易は詩をもつて答えた。

酬元八員外三月三十日慈恩寺相憶見寄（〇九九〇）

悵望慈恩三月尽、紫藤花落鳥関閑

悵望す慈恩に三月尽く、紫藤花落ちて鳥関閑たり 千〔送春〕・和〔藤〕

誠知曲水春相憶、其奈長沙老未還

誠に知りぬ曲水に春相憶ふを、長沙に老いて未だ還らざるを其奈せむ

赤嶺猿声催白首、黃茅瘴色換朱顏

赤嶺猿声白首を催す、黃茅瘴色朱顔を換ふ

誰言南国無霜雪、尽在愁人鬢雪間

誰か言し南国に霜雪無しと、尽く愁人鬢雪の間に在り 千〔感歎〕

後年、大和八年（八三四）に洛陽で鳥の鳴き声に託して春を惜しんでいる。六十三歳になっている。

三月晦日、晚聞鳥声〔三一三一〕

晚來林鳥語慙慙、似惜風光説向人
遣脱破袍勞報暖、催沽美酒敢辞貧

晚來林鳥語慙慙なり、風光を惜みて人に説くに似たり
破袍を脱せしめて暖を報ずるに勞す、美酒を沽ふを催して敢へて貧を辞せ
んや

声声勸醉応須醉、一歳唯残半日春

声声醉を勸む応に須く酔ふべし、一歳唯残す半日の春 千〔送春〕

四 「三月尽」の日本における展開と『奥の細道』

これらの作は、日本の文学に受容され、さらに「九月尽」の文学的主題を生み出す母体となったことは、太田郁子氏の論文に詳しい^⑤。具体的には、『古今集』の春歌下及び秋歌下の歌群、『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』における「三月尽」「九月尽」の部立などに見られる。

「三月尽」は、「惜春」「送春」の詩でもあり、「九月尽」は、「惜秋」「送秋」の詩でもある。『和漢朗詠集』では、「三月尽」であるが、『千載佳句』では、「送春」である。ここでは、特に「送春」「送秋」に焦点を当てて見る。

「送春」とは、春を擬人化し、ある時期にだけ人間界を訪れる旅人と見立て、それを見送ることである。白居易は、「送春」詩で、「人生は行客に似たり」と、人間の一生は旅人に似ていると言う。旅人である人間が、旅人である春を見送るのであるが、その時に春に親近感を強く感じ、春の風物を詩に詠み込んでいる。春の風物としては、「春風」「光」「風光」や、「落花」の紛々たる様子、春を惜しむ鳥の啼き声が出てくる。季節の推移は、老いを自覚させるので、老の感慨を加えた。まとめると、花が散り、春が春風や春の光とともに帰り去る時に老を感じる、鳥は春を引き留めるのかのように啼く、となる。

白居易は、「送春」詩で、「感時」と言っているが、これは杜甫の「春望」詩を襲ったのではないか。杜甫の表現を用いながら、送春の表現にしたということである。

日本における受容についてはどうか。『和漢朗詠集』の「三月尽」の日本人漢詩には、

送春不用動舟車、唯別殘鶯与落花

春を送るに舟車を動かすことを用ゐず、唯殘鶯と落花とに別る

菅原道真〔五三〕

若使韶光知我意、今宵旅宿在詩家

若し韶光をして我が意を知らせましかば、今宵の旅宿は詩が家に在らまし

同〔五四〕

留春不用関城固、花落随風鳥入雲

春を留るに関城の固めを用ゐず、花は落ちて風に随ひ鳥は雲に入る

尊敬〔五五〕

とあり、花や鳥は春（韶光）とともに立ち去るかのように詠む。道真は、最後の夜には春は詩人の家に泊まつてほしいと詠み、尊敬は、春は旅人であるから関所を通るはずであるが、人間ではないから、関所は役に立たない、と詠む。これらは「三月尽」の日本的な展開と言えよう。

『古今集』の在原元方の歌に、

をしめどもとどまらなくに春霞帰る道にし立ちぬと思へば（古今・春下〔一三〇〕）

とあるのは、「三月尽」になり、春の景物の「春霞」が（東に）出発することを詠む。

『源氏物語』若紫巻にも「三月尽」が使われている。三月晦日の翌日、すなわち四月一日の朝、光源氏は、昨夕に垣間見た少女への思いを詠むに当たり、自らを霞に見立て、少女を花に見立てた。

夕まぐれほのかに花の色を見てけさは霞の立ちぞわづらふ

一泊した「霞」が山桜の「花の色」に惹かれて、帰り難いと言うのである。一泊して人間世界を立ち去るところは、道真詩を翻案した趣きがある。ここでは人が春霞に成り代わり、その気持ちを詠んでいる。

関所を用いた季節の擬人化は、和漢朗詠集の「九月尽」の源順の句（二七四）にも見られる。

縦以嶠函為固、難留蕭瑟於雲衢

縦ひ嶠函を以て固めと為すとも、蕭瑟を雲衢に留め難し

縦令孟賁而追、何遮爽籟於風境

縦ひ孟賁をして追はしむとも、何ぞ爽籟を風境に遮らむ

ここでは、秋風を表わす「蕭瑟」、「爽籟」の語が秋の代名詞的に使われている。旅人である秋は、関所を通るはずであるが、人間ではないから、険しい「嶠函」の山や関も役立たないし、猛者の「孟賁」も境界で遮ることができない。また、大江以言（二七六）の句、

文峰案轡白駒景、詞海艤舟紅葉声

文峰に轡を案ず白駒の景、詞海に舟を艤ふ紅葉の声

では、五行説に基づく秋の白い光や紅葉が散る秋風の音が詩文の世界だけに辛うじて残り、やがて立ち去る様を詠む。詩の世界だけに残るのは、詩人が季節の推移を感じるからである。ここにも白居易の「三月尽」の発想が生きている。

これらは旅人に見立てた春や秋が帰り去る様子を表わしている。

芭蕉が冒頭部第一段で引く能因の歌には、

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関（後拾遺集・羈旅〔五一八〕）

とある。みちのくの入り口である白河の関の段では、この歌を引き、さらに、源頼政の、

都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白河の関（千載集・秋下〔三六五〕）

などを引く。能因歌は、秋の色を白いとする五行説を詠み込んだところに技巧がある。また、関所に吹く風や紅葉は、先行する『和漢朗詠集』の「九月尽」の作品から想を得たものと思われる。

その前提で能因の歌を見ると「霞とともに立」つというのは、霞が立つ春に都を発つとも読めるが、古今歌「をしめども」を踏まえて解釈すれば、「三月尽」に当たって、春が東に帰るとともに東に向かうとも読める。芭蕉も両方の読みをしたのではあるまいか。「白河の関にかかりて旅ごころ定まりぬ」とあるのは、白河の関が、みちのくへの旅のもう一つの出发点であることを示す。

「送春」は、人が旅人としての春を見送る行為であるが、白居易のように人が自らを旅人であるとみなす時、永遠の旅人である春と一体となって、春とともに旅立つという発想を生み出す。

俳諧は季節を重視する文芸である。芭蕉も白居易の「送春」に由来する表現を用いて、永遠に旅をする季節と一体になり、季節とともに旅をする道を選ぶことによって、自らの文学を永遠のものとしたのである。

注

- (1) 『魁本大字諸儒箋解古文真宝』（寛文元年（一六六一）刊）に「日月如流行過客」とあり、「光陰」は「日月」の意と解せる。
- (2) 吉川幸次郎『新唐詩選』（岩波新書・昭二七（一九五二））、『杜甫詩注第三冊』（筑摩書房・昭五四（一九七九））
- (3) 平岡武夫「三月尽―白氏歳時記―」『研究紀要』一八号・日本大学人文科学研究所・昭五一（一九七六）三月、『白居易―生涯と歳時記』所収・朋友書店・平一〇（一九九八）
- (4) 菅野禮行『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』（大修館書店・昭六三（一九八八））
- (5) 太田郁子『和漢朗詠集の三月尽・九月尽』（『言語と文芸』九一号（復刊一六号）・昭五六（一九八一）三月）

〔付記〕

1、本稿は、平成二十二年（二〇一〇）九月三日台湾大学で開催の第三回和漢比較文学会特別例会に先立って提出した同題の研究発表のための原稿に基づく（ただし、発表時は別に資料を作成し、それに基づいて発表した）。学会終了後、『2010 和漢比較文学検討会 論文集』（台湾大学・二〇一〇年十月）が刊行され、当該の提出原稿はその論文集に掲載された。本稿はその再録である。

今回、再録に当たって、横書を縦書とし、算用数字を漢数字とするなど表記を部分的に改めた。また、『千載佳句』及び『和漢朗詠集』の部立名を加え、原稿の誤りのいくつかを訂正した。なお、当初原稿及び論文集においては、英語題名「*Oku-no-Hosonichi and the End of March: Basho and Bai Juyi*」を付していた。

2、関連する拙稿として、「白居易と菅原道真の三月尽詩について―「送春」の表現―」『女子大國文』第百四十八号・平成二十三年一月三十一日発行）がある。併せて参照していただきたい。

平成二十五年八月十日 新聞記

（本学教授）